



TITLE:

# ハロッド“An Essay in Dynamic Theory”（1938年草稿）をめぐるハロッド=ケインズ往復書簡の解明（2）

AUTHOR(S):

中村, 隆之

---

CITATION:

中村, 隆之. ハロッド“An Essay in Dynamic Theory”（1938年草稿）をめぐるハロッド=ケインズ往復書簡の解明（2）. 経済論叢 2003, 171(5-6): 78-96

ISSUE DATE:

2003-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/45565>

RIGHT:

# ハロッド “An Essay in Dynamic Theory” (1938 年草稿) をめぐる ハロッド＝ケインズ往復書簡の解明（2）

中 村 隆 之

## IV 既存研究の評価

### 1 クレーゲル「経済動学と定常成長の理論：ハロッドの「ナイフエッジ」に関する歴史的試論」[1980]

Kregel [1980] は、「ハロッドのアプローチは二つのパートに分けることができ、第一のパートは動学理論に関するもので、理論の基本的な諸原理 (axioms) を導き出すもの、第二のパートは景気循環を分析するためにその諸原理を使うパートである」(Ibid., p. 114) と述べている。ハロッドがこの二段階の方法をとっていることを理解することが、ハロッドを理解する上で非常に重要であり、またそれをはっきりと理解しなかったことが様々な誤解を生んだのであるとクレーゲルは述べる。ハロッド自身の説明以外には初めてこの点を明確に指摘した点でクレーゲルは鋭く、この点に関しては私も全く同意できる。しかしケインズとハロッドの間に展開される議論を理解する仕方は同意できない点が多い。

まずクレーゲル論文の背景にあるナイフエッジ問題とは何かということから始めよう。ナイフエッジ問題には二通りの理解のされ方がある。第一には保証成長率が不安定であることの問題として、第二には保証成長率と自然成長率が異なるという問題の延長線上で、実は保証成長率とは一意ではなく、複数存在

するのだという主張に関係する問題として。ハロッド自身はナイフエッジ問題を第一の意味で捉え、ナイフエッジと呼ばれるほどの不安定性が存在するというのは私の主張ではないとして、自分の理論がハロッドのナイフエッジと呼ばれるのを拒否した (Harrod [1973] pp. 32-33, 邦訳49-51ページ)。しかし貯蓄率の変化によって複数の成長経路が存在するというカルドアや J. ロビンソンのようなポスト・ケインジアン<sup>1)</sup>の立場からすれば、ナイフエッジ問題とは第二の問題なのである<sup>2)</sup>。クレーゲルも保証成長率の複数性の問題としてナイフエッジ問題をとりあげる。そしてその問題が、ケインズの一時的均衡率および (ケインズに近づいたとクレーゲルがいう) 『経済動学』におけるハロッドの特殊保証成長率に関係していると主張するのである。

クレーゲルの主張を追ってみよう。不安定性に対するアプローチとしてクレーゲルは次の二種類があるという (Kregel [1980] pp. 104-105)。

- 1) タイプA 保証 (均衡) 成長率は純粋に「概念的」なものであり、参照する目的で用いる。システムがこの成長率で成長する必要はなく、分析的な目的で達成された成長率がそれに結び付けられたり、関係付けられたりするだけである。
- 2) タイプB 保証 (均衡) 成長率は、静学理論の需要と供給の均衡と同じように均衡である。システムが実際に均衡にある状態から、思想上の実験として概念的な乖離が生じたとする。そして元のポジションを維持する力があるかどうかを確かめる。

クレーゲルはケインズとハロッドを次のようにタイプ分けする。静態モデル・定常モデル・移動均衡モデル (Kregel [1976] pp. 214-217) を使うケインズは、均衡自体は概念的な参照基準でしかないのでタイプAである。ハロッドは『景気循環論』ではタイプAであったが、「一論」においてはタイプBにシフトしたという。ハロッドは一時点の  $s$  (貯蓄性向)、 $t$  (必要資本産出比率)

1) ロビンソンとハロッドの見解の相違は Robinson [1970], Harrod [1970] に表れている。篠崎 [1983a] [1991], 篠崎 [1992] 第6章に詳しい研究がある。

から保証成長率を導き出し、そこからの思考上の概念的な乖離によって、均衡に戻るのではなく遠心力が働く（つまり不安定である）と示しているからタイプBなのである。

クレーゲルはケインズの立場を次のように考える。失望と期待の修正のある世界では、現在持っている期待に応じた貯蓄性向というものがあり、従って期待の数に応じた複数の整合する保証成長経路があるはずである（Kregel [1980] p. 111）。ハロッドは一時点の方法によって期待も一つであるというだろうが、そうであれば各々の均衡の安定性に関するケインズの論点に答えていないことになる（*Ibid.*, p. 109）。つまりクレーゲルは、ケインズが不安定性の条件として提示したもの（ $Cr > s\Delta f$ ）は、現在の様々な期待に対応する様々な貯蓄性向の可能性という事態を受けて、その上で期待が変化を受ける時点から時点において不安定性が働くかを問題にしているというのである。それは期待と失望の連鎖という実際の歴史的時間における過程の問題であり、正常保証成長経路（期待に応じた正常保証成長経路が存在する）への回帰の問題である。そのような問題に対して、実際の時間過程において期待がどのように変化するかを考えることは当然である。ハロッドのように一つの時点に集中してその時点の唯一の期待を元に不安定性を証明しても意味がないのである（*Ibid.*, p. 106, n. 16）。

このケインズの立場が、『経済動学』において提示された貯蓄性向の可変性により変動する特殊保証成長率に基づいたハロッドの景気循環論に近いというのがクレーゲルの主張である（*Ibid.*, p. 115）。しかしクレーゲルの主張は以下のようないくつかの誤解から導き出されている。

- 1) 特殊保証成長率に基づく景気循環は「一論」の草稿においてすでに明らかであり、「景気循環の議論に移ると、ハロッドはケインズの提唱に完全に譲歩し、複数の「保証」率の可能性を許した」（*Ibid.*, p. 115）というのは正しくない。これはクレーゲルが「一論」の草稿を実際に読めなかったことからくる誤解といえよう。

- 2) ケインズの条件を貯蓄性向が変化することによる景気循環の反転のための条件としてクレーゲルは見ているが、先に見たようにケインズの条件には何の理論的根拠もない。貯蓄性向の変動性を扱うならば、貯蓄性向の変化率を扱った本来の不安定性の条件 ( $\Delta G/G > \Delta s/s$ ) のほうが適している。
- 3) ケインズは複数の長期期待に対応した正常保証成長「経路」を提示している (前稿第3図参照)。ケインズの正常保証成長経路の概念は期待に対応した貯蓄性向という考え方とは関係のない概念である。期待に対応した貯蓄性向により複数の正常保証成長経路を可能にするという考え方は、J. ロビンソンのナイフエッジ問題に対する考え方 (複数の貯蓄性向による複数の保証成長率) にとらわれているように思われる。
- 4) ケインズは複数の短期期待に対応した一時的保証成長「経路」を提示している (前稿第3図参照)。これは現在の短期期待に応じて複数の経路をとるが、それは期待に対応した貯蓄性向とは関係のない概念である。貯蓄率が景気循環の局面で変化するので複数の特殊保証成長率があるというハロッドの主張とケインズの概念は重なるところがない。

このような誤解を生んだ原因をもう少し整理すれば、

- A) ナイフエッジ問題……可変的貯蓄性向によって複数の保証成長率が可能になる
- B) ケインズは長期期待によって複数の正常保証成長経路を示した
- C) ケインズは可変的貯蓄性向により景気循環の反転の可能性を示した (ケインズの条件)

以上の三つから、ケインズには可変的貯蓄性向に基づく複数の可変的な保証成長率 (ハロッドの用語では特殊保証成長率) があつたとクレーゲルは考えたのである。しかし実際はケインズにハロッドの特殊保証成長率にあたる考え方があるわけではなく、『一般理論』第五章の移動均衡による景気循環論しかないのである。

もう少しクレーゲルの思考の背景に遡ってみると、ハロッドの不安定性原理

は一時点の分析という狭い理論であり、本来は期待の変化自体を中軸にした移動均衡論が適切であると考えていることが分かる。それはケインズの三つのモデルの方法をポスト・ケインズ派の成長分析に適用することで達成される。ロビンソンの成長理論では、ケインズの定常均衡モデルに相当する静穏(tranquil)成長経路がある(Robinson [1956] p. 66, 邦訳74ページ)。資本の限界効率(アニマル・スピリッツ)が独立変数、所得分配が従属変数であり、各階級の消費性向と流動性選好が所与である<sup>2)</sup>。ここから移動均衡分析への道を開くと、もちろん支配的な影響力を持つ資本の限界効率の変動(アニマル・スピリッツの強さ)を主軸とした経済変動論になるだろう。ケインズの移動均衡論が長期期待を主軸にしていたのと同様に、追いかけるけれども決して実際には到達しない均衡が主軸にあるのである。

この移動均衡論ではハロッドの論点が消えているが、それはなぜだろうか。ロビンソンの静穏成長経路において、所得分配が従属変数になっていたことが重要である<sup>3)</sup>。利潤と賃金の分配の変化は、利潤と賃金で異なった貯蓄性向を仮定する場合、貯蓄性向の変化を意味する。強いアニマル・スピリッツに基づく高い蓄積率の成長経路は、高い利潤分配による高い貯蓄性向によって支えられるのである。これがハロッドの論点が消えた原因である。所得分配が従属変数になることについて、ロビンソン自身の説明は明確ではないが、クレーゲルは一つの答えを持っていたようである。それはアイクナーの分配論である<sup>4)</sup>。アイクナーによれば、投資資金需要に従って企業が価格を設定し内部資金を調達するので、高い蓄積率と高い利潤分配が結びつくのである。

以上のようにクレーゲルは、ロビンソンとアイクナーという理論的背景を持っていたため、ケインズ・ロビンソンのな移動均衡論を支持する立場をとり、

2) Kregel [1976] p. 219, Kregel [1973] (邦訳序文18ページ)。

3) ロビンソンの分析において所得分配が受動的に決定されることにに関して、また同じ問題として資本稼働率の問題が欠けていることにに関して、しばしば問題とされた(たとえば Ciccone [1986])。

4) Eichner [1976], Eichner & Kregel [1975]。

その結果としてハロッドの不安定性原理は排除されたのである。

## 2 置塩「R. Harrod の動学再考」[1984], 「経済分析における微分方程式と定差方程式の援用について」[1982]

置塩 [1984] は、ケインズの批判の誤りを鋭く指摘している。保証成長上では

$$C_r \Delta Y_w = sY \quad \dots\dots (2)$$

$C_r$ : 必要資本産出比率,  $Y_w$ : 保証成長産出高,  $s$ : 貯蓄率

が成り立つ。ここで  $\Delta Y$  を 0 期と 1 期の差を表わすとすれば,  $\Delta Y = Y_w^1 - Y^0$  である。(2) 式の右辺の  $Y$  は  $Y_w^1$  を表わすのか  $Y^0$  を表わすのか。置塩氏は「明らかに  $Y_w^1$  である。というのは、 $Y$  は第 0 期の  $Y$  の値であり、保証成長率よりも成長率が大となろうとも変化しない。変化するのは次期すなわち第 1 期の  $Y$  であるからである」(置塩 [1984] 3 ページ) と述べている。そうすると

$$C_r(Y_w^1 - Y^0) = sY_w^1 \quad \text{従って} \quad (C_r - s)Y_w^1 = Y^0$$

となり,  $C_r > 0$ ,  $Y^0 > 0$  を考慮すれば,  $C_r > s$  でない限り,  $Y_w^1 > 0$  ではありえない。従って  $C_r \leq s$  ならば有意な  $Y_w^1$  が存在しない。しかし置塩氏は、「Harrod の保証成長率の存在と不安定性が  $C_r > s$  という仮定に存在しているとするケインズの批判は正しいだろうか。筆者 [置塩氏] はまったく誤っていると考える」(同上論文, 3 ページ) と述べている。それはハロッドの場合, (2) 式の右辺の  $Y$  は  $Y^0$  だからである。第 1 期に保証産出高から  $x (> 0)$  だけ超過した場合, ケインズは

$$C_r(Y_w^1 + x - Y^0) > s(Y_w^1 + x) \quad \text{従って} \quad C_r > s \quad \dots\dots (3)$$

が資本過少の条件となるが, ハロッドの場合は,

$$C_r(Y_w^1 + x - Y^0) > sY^0$$

が条件となる。後者は無条件に成立するのであり, このハロッドの議論の展開をケインズは理解せず, (3) 式に基づいて議論したことによって生じた誤解であるとする<sup>5)</sup>。しかしケインズの誤った批判にハロッドが明確な反論を行えて

5) 置塩 [1987] では同様の論点を, ケインズとハロッドの  $dK/dt=1$  の解釈の違いから導いノ

いない。それには二つの理由があると置塩氏はいう。

- 1) ハロッドがケインズの提出した条件  $C_r > s$  を、 $G/G > s/s$  と混同した
- 2) 「Harrod が動学分析において、経済諸量の時間前後の問題 (time-lag の問題といってもよい) が極めて重要であるという認識に欠けていた」(同上論文, 4-5 ページ)

第一の理由は正しいであろう。ケインズとの議論の末に「一論」の完成稿ではケインズの条件に類似した形で不安定性に条件を付けているからである。第二の理由は、置塩氏にとってハロッドの欠点と捉えられている。(2)式の  $Y$  が明らかに  $Y_h^0$  であるのに、ハロッドは  $Y^0$  と考えていると指摘していることからそれが見てとれる。置塩氏はハロッドの次のような態度に否定的なのである。

$x_0$  を 0 期の産出高、 $x_1$  を 1 期の産出高とすれば、成長率  $G$  は  $(x_1 - x_0)/x_0$  である。我々は期間を短いものと想定しているから、分子に置くのは  $x_0$  でも  $x_1$  でもどちらでもよい (Harrod [1939] par. 7)

置塩氏は、ハロッドがどちらでもよいとした二つは明確に違うのだから区別するべきであるということを強調する。置塩 [1982] では、微分方程式を用いてしまえば両者は同じでも、定差方程式を用いた表現では経済的な意味が異なるという点を特に指摘している。微分方程式  $dx/dt = bx$  は、時間的連関として

$$\alpha: x_t \rightarrow \frac{x_{t+h} - x_t}{h} \quad \beta: \frac{x_t - x_{t-h}}{h} \rightarrow x_t$$

のどちらを表わしているのか分からない。具体的に投資関数でいえば、 $I_t = v \dot{Y}_t$  は  $t$  時点およびより以前  $t-h$  の経済状態からの投資決定であるのか、もしくは  $t$  時点の投資が  $t$  および  $t+h$  時点の  $Y$  を決めるのか分からないということである<sup>6)</sup>。

ゝている。これは前稿第Ⅲ節において述べた定義の違いとパラレルの議論である。定義の違いが実質的な違いのように見えるのは誤った推論のせいであるのはすでに述べた通りである。

6) 置塩氏はハロッドを理論化する際に、時間順序を明確にしていないことで誤った推論に陥る可能性を指摘した。特にローズのハロッド理解に対して、時間順序の関係を明示する定差方程式ノ



以上のように全く性格を異にする2つの理論を同一の数学的表現で示さなければならないとすれば、それは大変に混乱的であるといわなければならない。そして私見では、このことによって、ある期間かなりの混乱が、ことに Harrod の  $G_w$ ,  $G$  の区別とその連関をめぐって生じたと思われる (置塩 [1982] 7 ページ)

置塩氏は、ケインズとハロッドの議論がかみ合っていない原因 (別々の定義の存在) を明らかにし、そうであるならばケインズの批判は誤っているという点まで正しかった。しかし両者の定義の違いが議論の本質とは関係なく、単に表現の違いであるということを指摘していない。むしろ逆に、表現の違いは意味の違いであるという議論を、ここに適用してしまったのである。

そこで今や置塩氏と対になる警句も必要である。「全く性質を同じくする2つの理論を異なった数学的表現で示さなければならないとすれば、それは大変に混乱的であると言わなければならない」と。

### 3 ベゾミ『「景気循環論」から「動学理論への一論」へ: ハロッド=ケインズ往復書簡1937-1938』[1995]

Besomi [1995] は、ハロッドの「一論」における基本方程式を単なる事後的な恒等関係に過ぎず、次にどのように行動するかという問題が欠落しているという立場をとる。『景気循環論』では原因と結果が時間的にリンクした分析であったけれども、「一論」は単なる結果の分析だと考えるのである。それはハロッドが一時点の方法を採用しているからである。一時点の方法と時間のプロセスを扱う方法との差異が明確に現れるのが、ハロッドに対するケインズの見解 (いわゆるケインズの条件) であるとベゾミは考えている。

---

をとることで鮮やかに論駁した (置塩 [1968] 110-121 ページ)。ここでの重要な教訓は「すでに実現した値以外を用いて意思決定をするような定式化をしてはならない。そのようなことをすれば制御できないはずの変数を制御できると仮定することになりかねない。しかし微分方程式での定式化ではその欠点を見抜きにくい」というものである。この論点に関して置塩氏の貢献はすばらしい。

ハロッドとケインズが経済行動の時間フローに対して与えた重要性の程度に違いがあるという事実が、誤解の源泉であるように思われる。しかし彼らの議論の過程で、時間インデックスを省くという便宜のために、この違いが隠れてしまった (Besomi [1995] p. 326)

まず、ケインズの条件が導かれた過程に関して、時間インデックスを明確にしようとしたベズミの推論を追ってみよう (*Ibid.*, pp. 326-329)。成長率の定義は、

$$G = \frac{\Delta Y_t}{Y_{t-\Delta t}} \cong \frac{\Delta Y_t}{Y_t}$$

である (ハロッドは後者でも大差ないと考えている)。次に貯蓄の供給は、次の二通りが考えられる。

$$(a) \quad S_t = s Y_{t-\Delta t} \quad (b) \quad S_t = s Y_t$$

定式(a)を用いるとハロッドの保証成長率が、定式(b)を用いるとケインズの保証成長率がそれぞれ導かれる。

$$G_{\Delta t}^{Harrod} = s/C_{\Delta t} \quad G_{\Delta t}^{Keynes} = s/(C_{\Delta t} - s\Delta t)^7$$

ハロッドの立場では、 $\Delta t \rightarrow 0$  により二つは異ならないということになるが、ケインズは  $C > s\Delta t$  の可能性を無視しなかった。両者の議論を説明してからベズミは、ケインズとハロッドの対立点は形式的にはこうなるが、この論点の背後にはハロッドの方法の独自性 (一時点の方法) があり、そこに議論が向かわなかったのは不幸なことであったという。

では具体的には、彼らは何を議論すればよかったのか。ベズミは  $\Delta t$  の意味を考えるべきだったという。ハロッドは  $\Delta t \rightarrow 0$  として微小期間では  $s$ ,  $C_r$  は一定であると考えすることで一つの動学理論=不安定性原理を導出した。係数  $s$ ,  $C_r$  が変化するのは分析の次のステージ=景気循環論に譲ればよいと考えていた。一方、ケインズは時間は実際に流れていて、 $\Delta t$  というインターバルを

7) ベズミは  $C_r$  が  $\Delta t$  によって可変的であることを認めて  $C_{\Delta t}$  としているのだが、(ケインズとハロッドの議論で彼らが間違っていたように) フローの時間単位のとる方による違いを反映してそう述べているように思われる (前稿第III節を参照)。

消すような夢想はしなかった。この  $\Delta t$  の間に  $s$  や  $C_r$  に変化が起こるのであるというわけである。

例えば  $\Delta t$  が十分に長かったとすれば、 $G$  の増加は認知可能な所得の増加を伴い、結局それは貯蓄性向の増加をもたらすだろう。原因となる均衡からの乖離 (例えば  $G > G_w$ ) は  $\Delta Y$  と  $\Delta s$  の結び付いた効果を通じて、追加的な投資を賄うことのできる総貯蓄の増加を生み出すだろう。この場合、ハロッドの不安定性原理は保持されない。新しい成長率は旧いものと同じく「保証」され、対応する均衡は中立的、もしくは安定的でさえあるだろう (Besomi [1995] p. 331)

ベゾミはこのように述べているものの、ある時間が経過することで貯蓄性向が変化するならば、不安定性原理が成り立たないことがあるという論点ならば、ハロッドはしっかりと受け取っている。しかし貯蓄性向が変化することとケインズの条件とは無関係であろう。

それにもかかわらずベゾミがケインズの見解を重視する理由は、単にベゾミがハロッドの一時点の方法を認めていないからである。ハロッドの基本方程式は結果の式であり、そこには決定の概念がないというのである。これは保証成長率に関する議論でおなじみの論点である<sup>8)</sup>。 $C = C_r$  であれば同じ成長率を維持すると仮定することはできないのであり、企業者の行動を定式化しなければならない。そしてその行動の仕方次第では、不安定性原理は成り立たないだろう、という議論である。私はこのような議論はハロッドに対する誤解であると考えるが、ベゾミは逆にハロッドの限界を示していると考えている。

「一論」の議論の全体はストックの量の予期しない変化に直面した企業者の行動に関する仮定にかかっている。これはとくに、不安定性に関する命題に当てはまる。ハロッドはその命題を証明したと信じていたが、それは実際には彼の動学が成立する可能性のためになされた前提に過ぎない (Besomi [1999])

8) Alexander [1950], Baumol [1951] など。

p. 188, 強調原文)

ハロッドの理論には行動の定式化が必要であるという議論は数多くある。この議論の是非は本論文の範囲ではない。ここではこの論点とケインズの条件を結び付けたものを明らかにしておくことで十分だろう。その見解とは次のようなものである。

ケインズは  $\Delta t$  を認めることで、過去と未来がシンメトリーではない不確実性の世界＝歴史的時間の世界を前提にしている。そしてそのことによって企業者の移ろいやすい期待＝投資決意が盛り込まれている。一方、ハロッドは一時点の方法を用いることで  $\Delta t$  を消して、過去と未来がシンメトリーな世界を前提にしている。そこでは現実の世界における期待の形成というプロセスが省かれている、と<sup>9)</sup>。

しかし不確実性・歴史的時間というケインズ経済学の根幹にかかわる要素（それ自体は無論重要である）をいくら持ち出しても、往復書簡におけるケインズとハロッドの論点に限っては、ケインズの見解を擁護することはできない。 $\Delta t$  の扱いという論点はそもそも誤りであるし、また、ハロッドの理論は期待の変化の原因を、行動の定式化からではなく、経済の構造的要因から示しているので、ハロッドが期待＝不確実性のない世界を想定しているということはないからである（前稿第 I 節のハロッドの方法論参照）

ベゾミのハロッド研究への貢献は多大であるが、この往復書簡の解明という主題に関しては、私は賛成できない。ベゾミは「一論」の推論を認めることができないという見解に引きずられ、ケインズを擁護する側に回っているように思われる。

#### 4 篠崎「保証成長の不安定性のためのケインズの条件とハロッドの条件」[1984]

篠崎 [1983b] [1983c] では往復書簡の一通一通に詳しい解説を与えていて、

9) ハロッドの理論のとした方法が不確実性の世界を対象とするという前提と対立するという見解は、Shackle [1984], Asimacopulos [1985] [1991] ch. 7 などに見られる。

難解な二人の議論を読み解くために有益である。篠崎 [1984] ではさらに進めて、両者の差異をもたらした原因に迫ろうとしている。篠崎はどちらかが間違っているというのではなく、想定されている投資関数が違うという。ケインズの場合、変動の原因を貯蓄「量」と投資「量」の比較に求めているので、投資関数および生産決定関数が、次のようになる (篠崎 [1984] 9-10ページ)。

$$\text{投資関数} \quad \dot{g} = f(I_r - I) \quad f(0) = 0, \quad f'(I_r - I) > 0$$

$$\text{生産決定} \quad \dot{G} = \phi(I_r - I) \quad \phi(0) = 0, \quad \phi'(I_r - I) > 0$$

$\dot{g}$  : 事前的投資の成長率,  $\dot{G}$  : 生産量の成長率,  $I_r$  : 必要投資,  $I$  : 事後的投資

それに対してハロッドは、現実の資本係数と必要資本係数の関係から変動が生まれるので、

$$\text{投資関数} \quad \dot{g} = F(C_r - C) \quad F(0) = 0, \quad F'(C_r - C) > 0$$

$$\text{生産決定} \quad \dot{G} = \Psi(C_r - C) \quad \Psi(0) = 0, \quad \Psi'(C_r - C) > 0$$

となる。そして「全体としてハロッドの条件の方がより動学的で、しかもより明快である。この違いが現れている理由として、まずケインズには静学的思考法が残っているのに対し、ハロッドは自己の動学の思考法を確立していたということがある」(同上論文, 16ページ) と述べている<sup>10)</sup>。

これが、ケインズはハロッドとは対照的に、時点から時点として変動を捉える思考を持っているという指摘ならば、それは明らかに正しい。しかし、本論の主張から明らかなように、ケインズのような貯蓄と投資の比較のやり方それ自体が問題を含んでいるのである。ケインズもハロッドも仮定の上では正しいが、ハロッドの方が動学的でかつ明快であるという評価では、ケインズの議論の欠陥を無視することになるだろう。

10) 同様の指摘として「ケインズの根底にはなお静学的均衡への偏向があるというべきだろう」(早川 [1985] 27ページ) がある。早川氏はケインズの推論が誤りであると断言している。

## 5 浅野「ケインズ vs. ハロッド：二つの分析視角について」[1992]

浅野 [1992] は往復書簡の議論だけを扱った論文ではなく、様々な角度からケインズとハロッドの対立した点を取りあげ、両者の分析視角の違いを浮き彫りにすることが目的である。しかし次のようなことから、この分析視角の違いに注目することは面白い。

このこと「[一論]をめぐる議論においてケインズがハロッドの主張を理解できなかったこと」は、他人の作品に対するケインズの理解能力の欠如などといったものとは関係がない。むしろ、それは、ハロッドの『景気循環論』から始まった両者の経済分析視角の相違が次第に拡大し、そして、1939年論文にいたって決定的なものにまでなったことを表わしている、とみたほうがいいだろう（浅野 [1992] 218ページ）

ケインズから始めよう。ケインズのもっとも重要な主張は有効需要の原理である。それは「生産活動が企業家の貨幣形態での有効需要予想によって制約される資本主義の特質を大きく浮かび上がらせることによって、不完全雇用均衡の成立可能性を示そうとしている点で、マルクスのいう貨幣資本循環の視角からの分析を意図した理論ということができる」（同上論文、220ページ）。ところでこの視角では、均衡水準を示すことはできても、1回限りの循環、定常的均衡しか示さない。だから、より長い期間の動態を見たいならば、その均衡を並べる移動均衡の理論にならざるを得ない。それでは期待の好転と悪化により景気循環が起るとしかいえないことになる。ハロッドはそのような説明を説明とは思わない。むしろ期待がどうして好転したり悪化したりするのかと問うのである。

そこでハロッドは企業者の決意を支配している経済構造を浮き彫りにしようとする。ハロッドの基本方程式から導かれる不安定性原理によって、変化の源泉である企業者の主観的な判断を支配している客観的な構造が見えるのである。そこでの彼の分析視角は、資本の拡大再生産を基調にしているから、生産資本

循環視角と呼べる(同上論文, 221ページ)。

私は前稿第Ⅱ-1, Ⅱ-2, Ⅱ-3節において、ケインズが移動均衡の理論に固執していることを見た。その固執の底には、ここでみた貨幣資本循環の分析視角があると言えるだろう。そして移動均衡ゆえに、時点から時点へとポジションを確定して行く形をとらざるを得ず、また、それがハロッドの一時点の動態把握と対立することも理解できるであろう。

浅野論文は往復書簡だけを扱ったものではないが、往復書簡における(表面だけみれば技術的な)対立の底にあるものを見事に浮き上がらせていると評価できる。

## V 結 論

本論では、ハロッド「動学理論への一論」草稿をめぐるケインズとの往復書簡における両者の対立点について、その思考の背景とともに解明してきた。1) ケインズが時間間隔に関する点で技術的な誤りに陥っていること、2) ケインズの背景には移動均衡論による動態把握という『一般理論』以来のケインズの方法があること、3) そのケインズの方法は、一時点での動態の方向をみるというハロッドの方法と対立したから、両者の理解が進まなかったこと、が分かった。

また、これまでこの往復書簡を題材にしてきた論者の見解を評価した。クレーゲルは移動均衡理論へのこだわりをもって、ハロッド「一論」の議論を低く評価した。ケインズの方が不確実性の世界にふさわしい論理を持っていて、その方がポスト・ケインジアン旗印に適合するという意識を持っていたからである。置塩は、時間間隔(time-lag)の問題としてこの往復書簡の議論を扱い、ハロッドが時間間隔を明確にする意識を欠いていたので、両者の議論およびその後のハロッド研究は混乱したと述べた。時間順序を明確にする定差方程式を用いるべきであるという置塩の見解は、確かに、誤謬を排除する上で重要な役割を果たす。しかしこのケインズとハロッドの議論に焦点を絞れば、ケイ

ンズが時間間隔を無用に、そして誤って強調していたということが、本論の見解から明らかである。ベズミは、クレーゲルと同様に、不確実性の世界においては期待が変化する歴史的時間をわれわれは生きているという観点から、ハロッドの一時点の方法を明確に抉り出しつつも否定している。篠崎は、ケインズとハロッドの差異が、その背後にある静学的思考法と動学的思考法の差異からきていると指摘している点で正しい。しかしケインズの議論の欠陥を指摘していない。浅野は、ケインズとハロッドの対立の背景には、貨幣資本循環の分析視角と生産資本循環の分析視角という相違があると鋭く指摘した。

以上から、結論できることは以下の二点である。第一は技術的な論点である。時間と時間を区切った離散型のモデルを構築する場合、ラグのある場合とラグをゼロにまで圧縮した場合では、変数が同じではないかもしれないということ。そして、それは速度を測定する時間間隔の問題であり、フローの時間単位の問題ではないこと。それらを混同してはならないという教訓が得られた。第二はポスト・ケインジアン思考習慣に関する点である。この往復書簡を解釈する多くの論者は、ケインズは不確実性の世界を前提にし、ハロッドはメカニカルな世界を前提にしていると理解し、前者を支持した。しかし浅野の指摘の通り、両者の差異は分析視角の違いによるのであり、「ケインズ理論の発展のためには二つの分析視角の総合こそ要請されている」(浅野[1992] 223ページ)のである。不確実性・歴史的時間というケインズの的な観点からハロッドを批判するべきではない。経済学者に言えることが、いつも嵐なので波が荒れているだろうということだけならば、彼らの仕事は他愛もなく無用である。ハロッドの分析視角をどう活かすかが課題として残されているのである。

#### 参考文献

- Alexander, S. S. [1950] "Mr. Harrod's Dynamic Model," *Economic Journal*, 60, Dec., pp. 724-739.  
 浅野栄一 [1976] 『景気循環と経済成長』新評論。  
 ——— [1992] 「ケインズ vs. ハロッド：2つの分析視角について」(根井雅弘・



- 西村周三編『現代経済学の再検討』日本評論社、202-224ページ。
- Asimacopulos, A. [1985] “Harrod on Harrod: the Evolution of ‘a Line of Steady Growth’,” *History of Political Economy*, 17 (4), pp. 619-635.
- [1991] *Keynes's General Theory and Accumulation*, Cambridge U. P.
- Baumol, W. J. [1951] *Economic Dynamics: an Introduction*, Macmillan. (山田勇・藤井栄一訳『経済動学序説』東洋経済新報社、1956年)。
- Besomi, D. [1995] “From the Trade Cycle to the “Essay in Dynamic Theory”: The Harrod-Keynes Correspondence, 1937-1938,” *History of Political Economy*, 27 (2), pp. 309-343.
- [1996] “An Additional Note on the Harrod-Keynes Correspondence,” *History of Political Economy*, 28 (2), pp. 281-294.
- [1998] “Harrod and the ‘Time-Lag Theories of Cycle’” in *Economic Dynamics, Trade and Growth*, eds. by G. Rampa et al., Macmillan, pp. 38-81.
- [1999] *The Making of Harrod's Dynamics*, Macmillan.
- Ciccone, R. [1986] “Accumulation and Capacity Utilization: Some Critical Considerations on Joan Robinson's Theory of Distribution,” *Political Economy*, 2 (1), pp. 17-36.
- Eichner, A. S. [1976] *The Megacorp and Oligopoly—Micro Foundations of Macro Dynamics*, Cambridge U. P. (川口弘監訳『巨大企業と寡占』日本経済評論社、1983年)。
- Eichner, A. S. & J. A. Kregel [1975] “An Essay on Post-Keynesian Theory: A New Paradigm in Economics,” *Journal of Economic Literature*, pp. 1293-1314.
- Harrod, R. F. [1936] *Trade Cycle: An Essay*, Oxford, Clarendon Press. (宮崎義一・浅野栄一訳『景気循環論』東洋経済新報社、1963年)。
- [1937] “Keynes and Traditional Theory,” *Econometrica*, 5, Jan., pp. 74-86. (ルカッチマン編『ケインズ経済学の発展』東洋経済新報社148-165ページ)。
- [1938a] “An Essay in Dynamic Theory,” MS, published by D. Besomi, *History of Political Economy*, 28 (2), 1996, pp. 253-289.
- [1938b] “Scope and Method of Economics,” *EJ*, 48, Sept., pp. 383-412.
- [1939] “An Essay in Dynamic Theory,” *EJ*, 49, March, pp. 14-33.
- [1948] *Towards a Dynamic Economics*, Macmillan. (高橋長太郎・鈴木聡一訳『動態経済学序説』有斐閣、1953年)。
- [1951] “Notes on Trade Cycle Theory,” *EJ*, 61, June, pp. 261-275.
- [1952] *Economic Essays*, Macmillan.

- [1960] "Second Essay in Dynamic Theory," *EJ*, 70, June, pp. 277-293.
- [1968] "What is a Model?" in *Value, Capital, and Growth, Papers in Honour of Sir John Hicks*, ed. by J. N. Wolfe, Edinburgh U. P., pp. 173-191.
- [1970] "Harrod after Twenty-One Years: A Comment," *EJ*, 80, Sept., pp. 737-741.
- [1973] *Economic Dynamics*, Macmillan. (宮崎義一訳『経済動学』丸善, 1976年)。
- 早川泰正 [1985] 「成長理論におけるハロッドとケインズ」『千葉商大論叢』第23巻第3号, 1-28ページ。
- Hicks, J. R. [1950] *A Contribution to the Theory of the Trade Cycle*, Oxford, Clarendon Press. (古谷弘訳『景気循環論』岩波書店, 1951年)。
- [1965] *Capital and Growth*, Oxford, Clarendon Press. (安井琢磨・福岡正夫訳『資本と成長』岩波書店, 1970年)。
- 伊東光晴 [1953] 「景気循環論における lag theory と antinomy theory」『一橋論叢』第29巻第5号, 412-433ページ。
- Kaldor, N. [1978] *Further Essays on Economic Theory*, Collected Economic Essays Vol. 5, Duckworth. (笹原昭五・高木邦彦訳『経済成長と分配理論: 理論経済学続論』日本経済評論社, 1989年)。
- Keynes, J. M. [[1930] 1971] *Treatise on Money I II*, Macmillan. (小泉明・長澤惟恭訳『貨幣論Ⅰ・Ⅱ』(ケインズ全集5・6), 東洋経済新報社, 1979年)。
- [1936] *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan. (塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』(ケインズ全集7), 東洋経済新報社, 1983年)。
- [1973] *The General Theory and After part II*, Collected Writings of John Maynard Keynes Vol. 14, Macmillan.
- Kregel, J. A. [1973] *The Reconstruction of Political Economy—An Introduction to Post-Keynesian Economics* (in 2nd ed. with a forward by Joan Robinson), Macmillan. (川口弘監訳, 緒方俊雄・福田川洋二共訳『政治経済学の再構築』日本経済評論社, 1978年)。
- [1976] "Economic Methodology in the Face of Uncertainty: The Modelling Methods of Keynes and the Post-Keynesians," *EJ*, 86, June, pp. 209-225.
- [1980] "Economic Dynamics and Theory of Steady Growth," *History of Political Economy*, 12 (1), pp. 97-123.
- 宮崎義一 [1953] 「景気循環に関する antinomy theory の基本性格」『横浜国立大学紀要』47-75ページ。

- 中村隆之 [2002] 「ハロッドのアンティノミー理論はなぜ失われたのか？」『経済学史学会年報』第41号, 58-69ページ。
- 置塩信雄 [1968] 「不安定性の論理」『神戸大学経済研究』第15巻, 97-137ページ。
- [1982] 「経済分析における微分方程式と定差方程式の援用について」『神戸大学経済学研究年報』第29号, 1-24ページ。
- [1984] 「R. Harrod の動学再考」『国民経済雑誌』第150巻第6号, 1-20ページ。
- [1987] 「保証成長率について——ケインズとハロッド——」『国民経済雑誌』第153巻第2号, 39-56ページ。
- Robinson, J. [1956] *The Accumulation of Capital*, Macmillan. (杉山清訳『資本蓄積論』みすず書房, 1957年)。
- [1962] *Essays in the Theory of Economic Growth*, Macmillan. (山田克巳訳『経済成長論』東洋経済新報社, 1963年)。
- [1970] “Harrod after Twenty-One Years,” *EJ*, 80, Sept., pp. 731-737. (山田克巳訳「21年後のハロッド」『資本理論とケインズ経済学』日本経済評論社, 1988年)。
- Samuelson, P. A. [1939] “A Synthesis of the Multiplier and the Principle of Acceleration,” *RES*, 21 (2), May, pp. 75-78. (小原敬士他訳『サミュエルソン経済学体系1』勁草書房, 1979年, 3-22ページ)。
- Shackle, G. I. S. [1984] “Harrod as Economist” in *Contemporary Economists in Perspective*, eds. by H. W. Spiegel & W. J. Samuels, Greenwich, Connecticut, Jai Press Inc., reprinted in *Business, Time and Thought*, ed. by S. F. Frowen, Macmillan, 1988, pp. 70-77.
- 篠崎敏雄 [1983a] 「ハロッドの「ナイフの刃」の問題の再検討」『香川大学経済論叢』第56巻第1号, 6-51ページ。
- [1983b] 「ケインズとハロッドの往復書簡と不安定性原理」『香川大学経済論叢』第56巻第2号, 1-39ページ。
- [1983c] 「保証成長の不安定のためのケインズの条件について」『香川大学経済学部研究所年報』23号, 1-68ページ。
- [1984] 「保証成長の不安定のためのケインズの条件とハロッドの条件」『香川大学経済論叢』第57巻第1号, 1-17ページ。
- [1991] 「ケインズ経済学の動学化におけるハロッドとロビンソン—ハロッド文書による研究」『香川大学経済論叢』第64巻第1号, 1-25ページ。
- [1992] 『ハロッドの経済動学体系の発展』信山社。
- [1993] 「ハロッドの経済動学に対するアシマコブロスの批判について」

『岡山商大論叢』第29巻第2号, 1-28ページ。

—— [1994] 「ハロッドの『景気循環論』をめぐるケインズとハロッドの往復書簡と動学的経済学」『岡山商大論叢』第30巻第3号, 1-47ページ。

—— [1999] 「ケインズが示した動学的経済学の基本方程式について」『岡山商大論叢』第34巻第3号, 1-19ページ。